



# 沖縄・八重山文化研究会会報

第 193 号

発行 沖縄・八重山文化研究会  
 事務局 沖縄県立芸術大学付属  
 研究所 波照間永吉研究室  
 那覇市首里金城町三一六  
 電話 〇九八—八八二—五〇四三

第一九三回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇〇八年九月二一日、県立芸大付属研究所内で開かれ、佐藤友美氏（西原町立図書館・町史編集係嘱託員）が「沖縄県石垣島新川方言の名詞形態論」と題して発表した。

佐藤さんは仙台出身。母が石垣市新川の出身だという。大学までは父の出身地の仙台で過ごし、その後琉大大学院に進んだ。今年年三月に院を卒業したばかりの若い研究者である。修論は「石垣市新川方言の名詞形態論」。琉球方言の助詞（助辞）の研究は野原三義らの先行研究があり、石垣方言の格助辞についても『石垣方言辞典』（宮城信勇）があるが、佐藤さんは名詞の格について、より詳細な調査・分析をおこない、名詞の格体系、用法を明らかにしようと試みた。今回はその修論の一部、特にハダカ格を中心に報告してもらった。インフォーマントになってくれたのは母方の祖母とその友人だという。

新川方言には格は十五個認められるという。それに助辞を伴わないハダカ格を含め

計十六個の格があることになる。これらの使用例を新川方言と現代日本語の対応を一覧表にして、具体的にわかりやすく説明したあと、特にハダカ格の用法や特徴について説明。新川方言のハダカ格は日本語の「が」「の」「を」などに対応する働きをもつという。日本語でも古典日本語ではハダカ格が主語になったりしたが、現代日本語では「が」「を」が発達したため、助辞のつかないハダカ格の用法はかなり限られてしまったという。新川方言にはハダカ格の主語、補語、また連体修飾語としての機能が残っていると、用例を示しながら説明した。

会場からは、既成の日本語名詞格の意味分類によるまとめかただけでなく、もっと別の分類もありうるのではないかという指摘や、数量詞や述語としての用法がハダカ格といえるかどうかへの疑問なども出されたが、ハダカ格についての研究が非常に少ないなか、琉球方言の格助詞についての一つのあらたな試みがなされたことに今後の期待をいだかせる報告であった。

## 沖縄県石垣市新川方言の名詞形態論

佐藤 友美

琉球方言は北琉球方言（奄美沖繩諸方言）と南琉球方言（宮古八重山諸方言）のふたつに大きく区分され、さらに前者は奄美徳之島諸方言・沖永良部与論沖繩北部諸方言・沖縄中南部諸方言に、後者は宮古諸方言・八重山諸方言・与那国方言に音韻的あるいは文法的特徴などから下位区分される。また、南琉球方言の八重山諸方言は、与那国島をのぞく八重山諸島（石垣島、竹富島、小浜島、新城島、黒島、鳩間島、西表島、波照間島）で話されている方言である。今回とりあげた新川方言は、八重山諸方言の下位方言である。

琉球方言の研究は、これまでにおおくの研究者らによっておこなわれてきた。しかし、音韻研究やアクセント研究に比べ、文法研究、とくに名詞の格についての詳細な調査・分析は、まだ十分におこなわれていないといってもよいだろう。

新川方言の名詞は、現代日本語と同様に主語や補語など文の部分になるという文論的な特徴と、連体的な形式によってかざられ、動詞・形容詞・その他の名詞をかざるという連語論的な特徴を持っている。名詞にいろいろなくつつきのとりつけをおこなうという手つづき（膠着）によって名詞の文法的なかたちをつくり、格＝とりたて、ならべという文法的なカテゴリーを表現している。格は、名詞が文や連語のなかで他の文の部分や単語に対してとることがら上の関係のちがいをあらわすはたらきをもっている。

新川方言には nu 格、ni 格、ju 格、kai 格、nanga 格、ji 格、sari 格、tu 格、kara 格、madi 格、jakan 格、kainu 格、tunu 格、karanu 格、madinu 格の 15 個の格がみとめられた。また、現代日本語と同様に格のくつつきをともなわない形もみられる。これをハダカ格とよび、他の格の形と対立する体形のひとつととらえる。これらの 16 個の格によって、新川方言の名詞の格体系が構成されている。

このうち、ハダカ格は格助辞をくつつけずに文の中にあらわれる名詞の基本的な格である。古典日本語では、ハダカ格が主語や直接対象の補語をあらわしたが、現代日本語では、それらをあらわす「が格」と「を格」が発達したため、ハダカ格の用法はかなりかぎられたものになっている。

現代日本語のばあい、が格の名詞は連用的な格としてはたらき、の格の名詞は連体的な格としてはたらく。それに対して、新川方言では ga 格はみられず、nu 格の名詞とハダカ格の名詞が、連体的な格としても連用的な格としてもはたらく。その点が現代日本語との大きなちがいである。nu 格・ハダカ格の名詞が連用的な格としても連体的な格としてもはたらくことは、ju 格、kai 格、nanga 格などの格の形が連用的な格としてのみはたらくのとはことなる。

新川方言のハダカ格の名詞は、文のなかで主語、補語、連体修飾語、状況語、独立語になってはたらく。また、jamindʒo: mu:ruʃi jutta:ru. (家族は みんなで 四人(だ)。)のように、現代日本語の「～だ」「～である」のかたちが、新川方言ではハダカのかたちであらわれることがある。これを、ハダカ格の名詞といえるかどうかは定かでないが、この名詞は文の中で述語になってはたらく。

### 1. 主語

ハダカ格の名詞は、文のなかで主語になって、述語のあらわすうごきや変化、状態などのもちぬしをあらわす。

(1) unu ʃa: bimba ba:ru:.

(その 子(が) ビンを 割ってある。)

## 2. 補語

他動詞が述語になるとき、できごとの実現にとって必要な対象をおぎなう補語が文の部分としてあらわれる。現代日本語では「を格」の名詞がはたらきかけをあらわす動作の対象をあらわすのに対して、新川方言ではハダカ格やju格の名詞があらわす。

(2) dʒi:ja dʒi:ro: idʒo:tta.

(祖父は 次郎(を) しかつた。)

## 3. 連体修飾語

連体修飾語になって、あとにつづく名詞をかざるのは、現代日本語では「の格」の名詞であるが、新川方言ではハダカ格の名詞とnu格の名詞が、文の中で連体修飾語になってはたらく。

(3) wa: tami-ni=du ſinʒi:kai idzarida.

(君(の) ため(せい)で 先生に おこられた。)

## 4. 状況語

ハダカ格の名詞は文の中で状況語としてはたらき、〈主体の量〉や〈通過する時間の量・程度〉をあらわす。

(4) mu:ru orine:na:ba banu pitu:ri nukuriru.

(みんな なくなってしまうて 私 一人 のこっている。)

## 5. 独立語

ひとをさしめす名詞が独立語になってよびかけとしてつかわれるとき、ハダカ格の名詞がもちいられる。

(5) dʒi:ro:, kunu ni:ja basute:madi katame: ikiçi:rja:

(次郎、この 荷物を バス停まで かついで 行ってくれ。)

## 6. 述語

現代日本語の「～だ」「～である」、新川方言の-jaru、-jaro:ruのかたちは、新川方言ではハダカ格の形であらわれることがある。これを、ハダカ格の名詞といえるかどうかは定かでないが、この名詞は文の中で述語になってはたらく。

(6) unu pito: banda: gakko:nu ſinʒi:.

(あの 人は 私たちの 学校の 先生(だ)。)

これまで、八重山方言の名詞研究において、格助辞は動詞や形容詞と同じようにひとつの単語としてあつかわれ、格助辞それ自体に意味があるとされてきた。そのため、nu格やju格などのような形がある格助辞はみとめられ、それについての研究もおこなわれてきたが、形のないハダカ格をひとつの格の形とみとめているものは少なく、そのハダカ格についての研究も非常に少ない。新川方言のハダカ格の名詞は、文の中で、主語、補語、連体修飾語、状況語、独立語、述語になってはたらき、その意味・用法も非常に面白い。このことから、ハダカ格は名詞の基本的な格であるといえる。

新刊紹介

富山善堂編著

精選八重山古典民謡集

— CD・歌詞付 —

現在『八重山毎日新聞』に連載中の「よくわかる新しい解釈 校合八重山古典民謡」は第Ⅱ期に入った。第Ⅰ期は全四五回にわたったが、その初回は二〇〇七年五月十九日。以来今年の五月十七日までほとんど毎週土または日曜日の紙面を大きく飾った。これは八重山古典民謡コンクールを主催する新聞社としてめざすところもあつたことと思われるが、同時に八重山の伝統文化の継承・発展を願い、八重山民謡の世界に親しむ多くの人々の知的欲求に応えようとする、大きな目的があつたことである。

本書はその第Ⅰ期に取り上げられた約五〇曲の中からコンクール「課題曲を中心に」三二曲を「精選」して編んだものである。八重山民謡については喜舎場永珣の名著『八重山民謡誌』がすでにあるが、本書の目的は明快で、コンクールに挑戦する人々や「教師・師範免許試験向けの稽古」のためになる一書たらしめるところにある。

収録された全曲は併録のCDによつて音としても確認できるよう配慮されていて、その意図するところは実現されているといえよう。

構成は、曲名の後に当該曲の詞章の「音教律」と「音階」を示し、次に「歌う場合」の歌詞が記載される。まずここに著者の工夫が現れる。すなわち八重山歌の詞章発音の生命線はその中舌母音にあるが、その表記法が資料集・辞典・研究書によつて幾種もあり初心者困惑させる。これを著者は同一歌詞を「い段中心の中舌音表記」と「う段中心の中舌音表記」の二種掲げることによつて改善しようとしている。煩瑣のようであるが一つのいきかたではある。

この「歌う場合の歌詞」に次いで「歌詞」の全体が記載される。そして、これを受けて「解説」と「語意」が続く。ここには実演家（師範）としての経験と学究としての研究成果が提示され、学ぶところが多い。特に『石垣方言辞典』の著者・宮城信勇氏の薫陶をうけた「語意」の説明は細を穿ち、本書の生命ともいふべき部分である。ほかに新聞連載中に読者から寄せられた質問に対する答えをまとめた「こぼれ話」や「主な文法用語解説」などが要所々に配置され、テキストとしての役割を十分に果たしている。

「伝統歌謡」に対する理解と態度は柔軟である。それは例えば「伝統歌謡は（中略）伝播の過程で新たな『時代』の、さらには新たな『土地・地域』の新鮮な息吹を取り入れながら、それぞれに別の生命を宿して変容していくもの」という形で表明される。このような言葉で教えられるととても楽になることだろう。古典はゆるがせに出来ないものという通り一遍の理解から自由だからである。

このように伸びやかで柔軟に思われる考えは、同時に歌詞の「訂正」や詞章の追加をも導きだすことになっていると思われる。これについては「石垣市の詩人『氏』」の質問が重要な問題提起をし、著者も真摯に応答している。

本書は著者が「伝統歌謡」に息吹を吹き込むために心血を注いだ一書である。本書が八重山古典民謡の実習者のみならず、八重山方言・八重山の歌謡文学に興味を持つ多くの人々にしっかりと受け止められることを期待し、著者の果敢な取り組みを讃えたいと思う。

（波照間永吉・沖縄県立芸術大学付属研究所教授）

★次回のお知らせ★

十一月十六日（日）午後五時～七時  
講師・演題は追ってお知らせします。